

ることができません。歴史的にも文字ができるまでは、まず、口で誦する、声に出(いだ)すという行為が先にあったのであります。

顧みれば、如来様は、第十八願文で既に「すなわち十念に至るまでせよ」と促して下されています。その「十念」とは口称念仏であると明らかにして下さったのは善導大師様であり法然聖人様でありました。

このように、念仏は、如来様の御本願に謳われ如来様から賜った「衆生の行」であり、如来様が願って下さるのですから、私は仰せの通りに「南無阿弥陀仏」と称えさせて戴くのです。

そこで「なむあみだぶつ」と称えるということその途端「南無阿弥陀仏」と聞こえて下されます。私達はこれを自分の声が聞こえただけだと思いがちですが、私の声が聞こえただけだというのは今生わずか何十年の経験則がそう言わしめている錯覚にすぎません。不思議なことのようですが実はそれは如来様のお喚び声なのです。なぜなら如来様は、因位の法蔵菩薩の時代に五劫もの時間をかけて建立された御本願のもとに兆歳永劫(ちょうさいようごう)の清らかなご修行を全うして御本願を完成され、いまや法蔵菩薩は阿弥陀如来とおなり遊ばして既に十劫のときを経ており、衆生済度のために今も働きづめに働いて下さるからであります(「仏願の本末」注釈版 p251「弥陀成仏のこのかたは いまに十劫をへたまへり」注釈版 P557)。

四、先達の歌に見る「称えて聞き入る名(みな)のはたらき」

このお心を原口針水和上は、

われ称え われ聞くなれど なもあみだ

つれてゆくぞの 親の呼び声 とお歌いになり、

また、京都女子学園の創設者でいらっしやった甲斐和里子女子は詩集「草かご」の中で、既に居ますみ親の存在をしかとかみしめ、そのみ

親に甘えるが如き姿で次のように謳いあげていらっしやいます。

御仏(みほとけ)を呼ぶわが声はみほとけの

われを喚(よ)びますみこ系なりけり

まことに衆生の行である「称名念仏」は如来様の願いのままに如来様の促しに出遇うて南無阿弥陀仏と称えている姿でありました。

「み仏を呼ぶわが声」というのは既に親様がおいでになるのを認識した言葉であります。顧みれば如来様は自らの存在をそれと知らぬ今生の私に向って「お前の親はここにおるぞ」と気づかせよう知らしめようと働き詰めに働いて下されたことでありました。如来様の本願招喚の勅命に呼び覚まされるとき、私は漸くにしてみ親の存在をしかとかみしめ、親に甘えるが如き姿で念仏できるのでありそのとき改めて如来様のお慈悲の深さを慶ぶことができる次第でありました。

このように、南無阿弥陀仏と親様を呼ぶとき聞こえて下さるものは私を喚びさまそうとする南無阿弥陀仏の御喚び声でありますから、そのお声、名(みな)に聞き入ることを「**聞名(もんみょう)**」と申すのであります。聞名のその時、今更ながらに阿弥陀如来様のお慈悲の深さが胸底深く沁み渡って下さることでありました。

かくして名(みな)に聞き入る衆生の姿は如来様の仰せを仰せの通りに受け止めている姿ですから、仰せに対して疑いの蓋を雑(まじ)えない状態が実現しており、それは信心(信樂)を意味しますから、このとき信心を頂戴していることになるのであります。合掌(玄宥記)

正覚寺仏教壮年会例会	毎月第一日曜午後八時より
正覚寺仏教婦人会例会	毎月十六日午後七時より
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)	
〒五二〇 〇五〇一滋賀県大津市北小松四五二番地 ☎〇七七 五九六 〇一六六	
FAX 〇七七 五九六 〇一六六 mx-ll・mhkatata@mx.scn.tv 使務 堅田玄宥	